

最優秀賞

『将棋の子』 大崎善生著

文学部 4 年 折田吉宏

2015年の8月、将棋界で羽生善治がまた偉業を成し遂げた。通算勝利数の記録が1321勝を達成し、単独で歴代二位になったのだ。逆説的に考えれば1321回の一つ一つに、羽生という抜きんでた才能の持ち主に果敢に挑んだ結果、悔しさを押さえながら「参りました」とつぶやいた人がいる事になる。

このニュースを見て、堪らなく紹介したくなった本がある。本書は将棋の奨励会という、天才が凡才になる魔窟に入り、夢を叶えられず散り散りに消えていった人たちの足跡を辿ったノンフィクションだ。奨励会は厳格に年齢制限が決まっており、原則として21歳の誕生日までに初段、26歳までに四段にならなければ、将棋のプロにはなれない。特に羽生世代と呼ばれる将棋界に台風をもたらした集団が登場してから、今までの戦法が通用しなくなっていく。運悪く羽生世代にぶつかってしまった、大学生とほとんど同じ年頃の棋士たちが、当時中学生だった羽生の将棋に戦々恐々としながら誕生日を迎えていたのだ。そして上記の条件を達成できなければ、子供のころから将棋しかしてこなかった元天才が敗北感を抱えたまま社会の荒波に、ぽつんと放り出されるのである。

本書の構成は将棋の雑誌編集をしている筆者が、懇意にしていた成田を主軸に、奨励会から去って行った様々な棋士のその後の話に触れながら進む。留意したいのは、確かにどのエピソードも挫折と苦悩から始まるが、決して「将棋の子」はネガティブな本ではない。筆者の筆致は温かく、元天才たちが過去と向き合い、どのように乗り越えていったかに焦点が当てられているので、読後感は多くの人を励ますはずだ。例えば奨励会落ちした米谷は刻苦勉励を重ねて司法書士の資格を取る。「将棋から逃げた自分が恥ずかしかった…でも、一生懸命頑張ってもう一度みんなの前に顔を出したかった」と言って筆者と一緒に酒をあおるシーンは印象的だ。涙を誘う成田の物語も最後に「一回も勝てなくてもハブゼン（羽生の愛称）は人生の誇り」と堂々と語り、鬱屈したところはない。

「努力したものが成功するとは限らない。しかし努力なくして成功する者はいない」という格言がある。では、全力で努力した結果夢を叶えられなかったら？最初に抱いた夢を叶えて成功できるのは、ほんの一握りだ。

そして人生は夢破れた先も続いていく。私は成田が「今でも将棋が自分を支えてくれる」と語る姿に強く感銘を受けた。部活や勉強、何であれ努力は決して無駄にならない。「将棋の子」はあらゆる努力は成功と失敗という単純な二項対立を乗り越えて、自分の軸を形作っていく糧になることを正面から感じさせる作品である。私はフィクションばかり読んできたが、ノンフィクションの持つ力強さと重みという新しい世界の魅力に気づけた一冊だ。